

図書館情報学教育の現状と動向に関する調査研究*

—中国、韓国の大学院と北米の Information School を対象として—

方香蘭 (学籍番号 200621342)

研究指導教員：杉本重雄

副研究指導教員：永森光晴

1. はじめに

1990年代からアメリカを中心にして Information School と呼ばれる、新しい情報学教育の潮流が起こってきた。本研究は、そうした潮流の中で議論された情報学の教育、研究の内容、特色がどのようなものであり、現在どのような状況であるかについての調査を目的としたものである。

2. 背景

1990年代のインターネットワークの爆発的な発展による情報環境の劇的な変化とともに、図書館情報学教育の再構築の動きが始まった。アメリカにおける図書館情報学教育に関する調査プロジェクト KALIPER 報告 (1998年—2000年) [1]、及び、日本におけるプロジェクト LIPER (2003年—2006年) [2] がすすめられた。

アメリカを中心にした地域で図書館情報学系の分野において 90年代に始まった Information School (iScool) と呼ばれる新しい教育と研究を目指す大学院が増えている。また、iSchool の連携組織も出現した。北米を中心とする有力な大学院の集まりによる iCaucus と呼ばれる組織が作られた。アジア太平洋地域でも CiSAP という組織が作られた。こうした動きとは別に、デジタルライブラリのカリキュラムに関するモジュールを開発する共同研究も進められた[3]。

3. 図書館情報学教育機関の調査

本研究では、北米地域と東部アジア地域などにおける、図書館情報学あるいは情報学に関する修士レベルの教育を実施している大学院の中

*“Surveillance study on current state and trend of library and information science education —For China, Korean graduate school and North American Information School—” By Xianglan FANG

から、ウェブ上にカリキュラムなどのデータを公開している大学院を選んで調査を行った。本研究で収集したのは、各大学院の専門分野の名称、教育用カリキュラムと教員に関するデータである。東アジアでは日本 (3校)、中国 (16校)、韓国 (14校) の大学院の修士課程と欧米英語圏では iCaucus メンバー (25校) の修士課程、合計 58校を対象としてデータを収集した。

4. 収集データに関する分析結果

4.1 学校の専門分野の名称

専門分野の名称から各大学院の教育内容を分析した。その結果、各地域の大学院には類似した専門分野があるものの、欧米英語圏は東アジア圏に比べて、情報中心、コンピュータ技術中心、学際的内容のものが多いことが分かった。

4.2 図書館情報学分野の分類スキームによる科目分類

カリキュラムに含まれる講義科目を、アメリカ図書館情報学教育学会 (ALISE) による図書館情報学分野の分類スキーム (LIS スキーム) を用いて分類することで、各大学院の教育における、教育内容の中心や偏りを調べた。

分析から、各地域共に、情報システムと検索、図書館情報学の基本理論に関する科目が多数設置される一方、コレクション、図書館など伝統的内容に関する科目が比較的少ないことが分かった。

4.3 「NDC 新訂 9 版分類表」による分類

対象大学院の設置科目の内容が他のどの学問分野と関係しているのか、その学際性の程度を調べるために NDC を利用した分析を行った。その結果、法律、医学、音楽、歴史、社会分野などと繋がりを持つことが分かった。

4.4 科目名に現れる名詞による分析

科目名はその科目をもっともよく表現する名

詞からなるとの前提に立ち、科目名称によく使われる名詞を抽出し、その出現頻度から領域の特徴を見ようとした。

全地域共に使用頻度が最も高い名詞は「情報」であった。欧米では使用頻度が高い名詞は「Information」、「Technology」などの情報技術的意味の名詞であった。韓国では「情報」が第1位で「図書館」が第2位になった。日本で使用頻度が高い名詞は、情報、管理、資源、システム、メディアであり、図書館学のイメージが薄くなり、中心が「情報」、「メディア」へ移っていると思われる。

4.5 デジタルライブラリ教育の現状

地域・大学におけるデジタルライブラリに対する教育の状況を調査した。その結果、ほとんどの地域に科目レベルの程度を設置した大学院があった。その中でも米国と英国にはデジタルライブラリの専門コースを設置した大学院が多数あった。

4.6 教員の専門分野

教授陣の専門性はカリキュラム内容に関係していると考えられる。調査の結果、各地域の大学において伝統的な図書館情報学領域、情報技術領域の専門性を持つ教員が多い。欧米圏ではコンピュータサイエンスを専攻した教員が最も多い。

4.7 教員の専任/兼任の割合

教員の数量的要素も教育の中心と内容に間接的な関係を持っている。調査結果、中国では兼任教師というのがほとんどなかったが、アメリカでは専任・兼任教師が全部存在し、非常勤教師の割合が半分以上である学校もあった。

5. 考察

収集したデータを各視点での調査分析の結果、北米を中心にした地域の教育は、東アジアと同一点も、差異もあった。

北米を中心にした欧米は、「情報」、「技術」の要素が「図書館」よりかなり大きく、情報技術を中心とすること、学際性も強くなっていることが分かる。また、デジタルライブラリのような新分野へも対応している。北米を中心にした Information School の潮流を引っ張っていく

役割をしていると思われる。

日中韓の間には若干の違いがあるが、アメリカのように顕著な傾向は見えず、ほぼ同じである。日中韓は図書館情報学に相応しい科目を多数持ち、図書館情報学出身の教員も多数であり「図書館情報学」らしいイメージを持っている。

本研究の結果からみると、図書館情報学の学問分野は KALIPER が予測した動向のとおり発展したと思われる。以下に、本研究から得た結果をまとめる。

- (1) 図書館情報学の対象は、制度としての図書館および図書館特有の運営から、より広範な情報環境・情報問題へと広がっている。
- (2) 図書館情報学のカリキュラムの中に他分野の視点を取り込み、学際性を増す動きが続いている。
- (3) 情報技術への傾斜が強まり、カリキュラムに組み入れる動きが広がっていると思われる。

おわりに

北米を中心にした地域の図書館情報学領域の大学における教育の中心は、伝統的な領域を残しつつも情報と技術に向かっており、図書館情報学分野を先導していると考えられる。日中韓等の地域もアメリカに従う動きがあると理解できる。

各国・地域・大学の間にはいろいろな差異がある一方、類似点もある。また、世界的なコミュニティによる共同研究等もあり、教育の目標、発展方向は同じであると思われる。各大学は周りの状況をよく見ながら、時代の流れに遅れない努力をしていると思われる。

文献

- [1] KALIPER報告書（日本語訳）(2005-01-07).
Homepage.
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jslis/liper/kaliper.html>
- [2]第一部 研究成果報告. Liper 報告書
(2006-01-23).Homepage.<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jslis/liper/report06/report.htm>
- [3] Curriculum on Digital Libraries.
Homepage .http://en.wikiversity.org/wiki/Curriculum_on_Digital_Libraries